



H01 ツバメ

担当カラー：紫

共通情報

・フローランダ

四季の移ろいが美しい国。

・イルム

フローランダにある大きな都市の名前。商業が盛んで、いわゆる都会。

・クレール

イルムから東に向かったところに位置する小さな町の名前。自然豊かで、いわゆる田舎。

・^{くすし}薬師とは

この世界の薬師は患者を診察し、適切な薬を処方する。

現代でいう医師と薬剤師を兼ねた職業だ。

どの薬屋にも独自の調合書があり、口外しない決まりになっている。薬屋は薬草園を所有し、薬草の品質保持のため庭師を雇うことが必須である。

・庭師とは

この世界の庭師は植物の専門家であり、庭の管理を行う職業だ。

一般家庭や公共施設の庭園管理が主な職場だが、薬草管理資格を持つ者は薬屋に勤めることができる。

『薬屋クロラント』

薬屋クロラントは、イルムという大都市の中心部にある大薬舗だ。^{だい やくほ}
その大きな薬屋には多くの薬師と庭師が働いていて、日々、患者を支えていた。

そして、それを取りまとめているのが、俺の父だ。
父は一代にして薬屋クロラントを築いた有能な薬師であり、優秀な経営者だった。

俺はそんな父のもとに生まれた。
薬師として、経営者として仕事に追われる父はまさに仕事人間。
そんな父に構ってほしくて、小さいころはあとをついて回っていた。
その中で、患者や薬師たちと話す機会が多くあった。

「はやくげんきになってね」
「もうおくすりつくったの？」

思えば、人見知りをしない子どもだったと思う。
こうして声をかければお菓子がもらえたから、なんて、現金な考えもあったけれど。
でも、誰かと話すことは楽しいと、このときには思っていた。

嘘

ある日、俺は父が患者と会話をしているところを聞いてしまった。
末期の病で床に伏せる患者に、父は言う。

「大丈夫ですよ」

俺は不思議で仕方なかった。
だって父は、診療記録を見ながらつぶやいていた。
「もうそろそろ、か」って。

父がなぜそんなことを——そんな嘘をついたのか、そのときはわからなかった。

けれど、父や薬師の言動を見ていると「痛くないですよ」「問題ありません」「結果はそんなに悪くないですよ」……。

それが『必要な嘘』だと気づいたのは、いつだっただろうか。

人間関係

学校では、有名な薬屋の息子だからと敬遠されていた。

だから俺は、嘘をついた。

それは、誰かが好きだと言った音楽に。

「それ、俺も好きなんだ」

それは、誰かが言った悪口に。

「俺もそう思うよ」

同調して、笑顔でいれば、仲間に入れてもらえる。

そうしていれば、誰とでも仲良くなれる——必要な嘘。

人間関係を築くことが、簡単になった。

けれど、そうやって過ごすうちに、嘘をつくことが当たり前になっていった。

自分の本音を見せれば受け入れてもらえないんじゃないかって、どんどんとこわくなっていった。

植物との出会い

薬師とは何度も話すことがあったけれど、庭師と話す機会はあまりなかった。

家の薬草園に入ることは禁止されていたからだ。

そんな俺が薬草園に忍び込んだのは十歳のころ。

単純な好奇心から足を踏み入れたそこは、草と土の香りであふれていた。

「ツバメくん。お父さんにここへ来ちゃだめだって言われていたよね」

突然声をかけられて驚いた。

振り返るとそこには、老年の庭師が立っていた。

「ごめんなさい。でも、どうしても気になっちゃって」

「植物に興味があるのかい」

「うん！」

うなずかないと追い出されると思ったから、嘘をついた。

俺の嘘に騙^{だま}された庭師はにっこりと笑って「じゃあ、ちょっとだけ見てみようか」と言った。

それから、植物の名前や薬効、育て方をひとつずつ丁寧に教えてくれる。

「植物は正直なんだ。だから、庭師も嘘をつくことはできない」

どきっとした。

この人は、嘘をついた俺のことを見抜いているんじゃないかと思った。

俺を見つめる瞳が優しく光る。

「ツバメくんもきっと、植物を好きになるよ」

どうしてかその言葉に——嘘はないと思った。

嘘をつくことが当たり前になってしまった俺が、植物の世話なんてできるのだろうか。

俺が植物に興味を持ったのは、この日から。

それから、薬草園に何度か通うようになった。

母親について

忙しい父に代わり、俺を育ててくれたのは母だった。
母には持病があったから、一緒に出かけた記憶はあまりないけれど。
それでも、母はいつも俺の言葉に耳を傾けてくれた。
薬草園から帰ってきた日も、そうだった。
母親の「どこへ行ってたの？」という問いに、「外だよ」ととっさに返してしまった。
けれど、彼女は首を振る。

「わかってるんだから。庭師さんとどんなお話をしたの？」

問われ、俺は庭師から言われた言葉、それを受けて俺が植物に興味を持ったことを話した。
自分がどうしたいのかを言葉にしたのは、これが初めてだった。

「薬草園は毒草などもあって危ないから、ちゃんと気をつけること。
お父さんにはバレないようにね」

とウィンクをする。
それから俺の手を取って、静かに言った。

「私たちは、ツバメに自由に生きてほしいと思っているのよ」

そして、ツバメは嘘なんかつかなくていいのに、と言葉を続けた。
唯一、嘘をつけない相手、嘘をつかなくてもいい相手が母だった。
俺はそんな母が大好きだった。
——母の病が、悪化した。
今まで飲んでいた薬が効かなくなり、父は研究室にこもるようになった。
父は何年も薬の研究を続けたが、いまだに成果は出ない。
母の容態はゆっくりと、確実に悪化していた。

庭師と万能薬

俺は、薬草管理資格を取り、薬屋の庭師になることを選んだ。
それは母のためでもあり、自分のためでもあった。
植物の前では、母のように素直でいられることに気づいたのだ。
資格を取ったあとは家で働き、老年の庭師の跡を継いだ。

それから数年がたった、ある日。
父に呼び出されて執務室へ向かうと、

「薬屋リーファへ行き、秘密を調べてきてほしい」

と、言い渡される。
突然の話に、そして聞き馴染みのない名前に首をかしげると、父は続けた。

「うちにかかっていた難病の患者が、リーファの薬で完治したところばしたんだ。長年、投薬治療しても回復が見られなかったのに」

それが完治した……ということは、その薬屋がよほど優秀なのではないかと問えば、父は首を振る。

「優秀という言葉でかたづくことじゃないんだ。その薬屋の持つ調合書には、絶対になにか秘密がある。それこそ、万能薬のような…」

万能薬は、おとぎ話に出てくるものだ。
そんなものがあるとは到底思えない、けれど、クロラントはフローランダでも指折りの薬屋だ。
うちで治せないのに、名も知られていない小さな薬屋が治せるということがおかしいのだと、父は言う。

「現在のリーファは娘が一人で経営しているらしい。取り入れることは簡単だろう」

取り入る。

つまり、懐柔して秘密を探ってこい、ということだ。

俺が人に対して嘘をつくことを、父は知っていた？

父は自分のことなど見てもいないと思っていたのに……。

いや、それよりも、薬屋リーファの秘密を知ることができたら。

万能薬なんてものが本当に存在するのなら——母を、救える。

かつて俺の話を笑顔で聞いてくれた顔は痩せこけて、その笑みには諦めの色がにじんでいる。

時間がない。

俺と父はそのことを理解していた。

自分の振る舞いが役立って、大好きな母を救えるなら——俺は、父の提案にうなずいた。

薬屋リーファへ

イルムから東へ向かった小さな町に、薬屋リーファはあるらしい。

そこでは新しい庭師を募集していて、父は権力を使い、俺を契約させることに成功した。

遠方の薬屋に勤める場合、住み込みの契約となることが多く、今回もそうだった。

けれど、リーファの秘密を調べるにはうってつけだと思った。

家を出て、小さな町・クレールへ降り立つ。

俺は地図を片手に、静かな田舎町を歩き出した。

キャラクターのまとめ

- ・ ツバメ (23)
- ・ 一人称 / 俺 二人称 / 君
- ・ 都市最大の薬屋クロラントの息子であり、植物が好きな庭師である
- ・ 『必要な嘘はある』という考えを持っているため、そうした嘘をつくことに抵抗がない
- ・ 幼少期は父のあとをついて回り、患者に声をかけるなど人見知りのしない賢い子どもだった
- ・ 基本的に人にあわせて過ごしているので表面上は『人当たりがいい』『陽気な性格』、そうしているときは身振り手振りが大きい
- ・ 嘘で本音を隠してきたので、本音で誰かと向き合うことがこわいと思っている
- ・ 「植物は正直だ。だから庭師も嘘をつくことができない」という老年の庭師の言葉どおり、植物の前では本音を言えるようだ
- ・ 学生時代、異性からの告白には基本的に応じていたので、恋人はいたものの自ら告白したことはない
- ・ 薬屋リーファにあると思われる万能薬、または秘密の調合書を探るために来た
- ・ 好きなものは植物と紅茶（ハーブティーなど、いつか自分の育てた花でブレンドティーを作ることが夢）
- ・ 苦手なものは生魚（臭みがだめ、新鮮なものならおそらく食べられる）
- ・ 趣味はガーデニング（花壇やプランターなどをいじることが好き）

話したくないこと

- ・ 薬屋リーファの秘密を探りに来ていること
- ・ ルルに取り入ろうとしていること